

2020年8月30日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

民数記 11：24～30

ルカによる福音書 9：49～50

「逆らわない者は味方」

<理解できない弟子たち>

ルカによる福音書で、イエスさまはこれまで、ご自分が神の御子であり、神に遣わされたメシア、救い主であること。その救い主は、どのようにして神さまの救いの御業を成し遂げるか、ということ語って来られました。イエスさまは苦しみを受けられ、排斥されて殺され、それから復活なさって、救いの御業を成し遂げられる救い主です。

それは、まず 9 章 22 節でこのように語られていました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」そして、再び 44 節で「人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」と言われました。

しかし、イエスさまに従う弟子たちには、まだイエスさまの仰ることの意味がよく分かりません。自分たちの「救い主」となる方が、苦しみを受け、死ぬなんていうことが理解できなかった。だって、自分たちを苦しみから救い出す「救い主」は、力強く、人々の心を掴み、敵を倒し、諸国を打ち負かして支配し、滅びた王国を立て直すような、強い王でなければならぬからです。

弟子たちは「救い主」という存在に、自分たちの理想のイメージを抱いていました。それに救いも、自分たちの理想の国、かつての栄華を極めたイスラエル王国が再び建て直されることであると、考えていたかも知れません。

<救いとは>

わたしたちも、初めて聖書の言葉を聞いた時は、神の御子のイエスさまが十字架に架かって死ぬことで、わたしが救われる、ということがよく分からなかったのではないのでしょうか。イエスさまの十字架の死によって、罪を赦されることが救いなのだ、と言われても、ピンとこなかったのではないのでしょうか。

わたしたちは、救いというものを、自分の都合の良いように捉えがちかも知れません。今自分を苦しめている問題が解決すること。切実な願いが叶うこと。恵まれた生活をして、幸せで穏やかで安心して暮らせること。それがわたしにとっての救いだ。そして、神さまだったら、それを叶えてくれて当たり前じゃないか。そんな風に考えているかも知れません。

確かに、それらの願いは、誰もが心から求めるものです。でも、それ自体が、わたしたちを根本から救うものにはなりません。確かに、それらが与えられている時は平和で、満たさ

れているかも知れません。しかし、生活や健康やお金や仕事や人間関係というものは、絶対的なものではありません。いつでも揺らいだり、壊れたり、失われたりするものです。それらを奪う究極的なものは、死です。

では、わたしたちの救いとは何でしょうか。

それは、わたしたちが造り主である神さまを知り、神さまとの正しい関係に生きることです。そのことによって、人生には様々なことが起こったとしても、神さまにあって平安な、確かな人生を歩むことが出来るのです。神さまを知り、神さまを礼拝し、神さまとの交わりに生きること。それがわたしたち人間の本当の救いです。

イエスさまは、「神の国」を宣べ伝えられました。神の国とは、神さまのご支配のことです。神さまに造られたすべての人が、神さまの恵みの中で、神さまを礼拝して、神さまと共に生きること。これこそ、人間の本来の姿であり、まことの喜びであり、平和であり、幸いなのです。人々が御言葉を聞き、賛美と祈りをささげ、神さまを礼拝している姿こそ、救われた人間の姿です。

しかし、人は自分中心の思いに捉われています。神さまを崇めるところか、自分の思い通りに、神さまに従って欲しいと思っている。自分の願いを神さまに叶えさせようとしている。人の人生はお造りになった神さまのものなのに、神さまがわたしたちに主人なのに、その神さまから離れて、自分を自分の主人として、自己中心的に歩んでいる。神さまをまことに自分の神さまとして礼拝しないこと。これこそが罪であり、わたしたちは皆そのような深い罪に捕らわれているのです。

神さまとの関係が歪むと、神さまが共に生きるようにと与えて下さった隣人との関係も、上手く築くことは出来ません。それがまた、わたしたちを苦しめ、悩ませます。そしてわたしたちは、命の源である神さまから離れて、滅びへと向かっていくのです。

このようなわたしたちの罪は、神さまを深く悲しませ、また激しく怒らせるものです。

しかし神さまは、そのようなわたしたちを罪から救い出し、解放し、神さまの許に立ち帰らせるために、メシア、救い主として、イエスさまをこの世に遣わされました。神さまの独り子であるイエスさまは、まことの人となり、人と共に地上を歩んで下さいました。そうして神さまが、わたしたちが罪深くても、どこまでも愛し、どこまでも共にいて下さること、わたしたちが神さまの許に立ち帰ることを望んでおられることを教えて下さったのです。

そして、わたしたちが罪の奴隷ではなくて、神の子として歩むために、わたしたちの罪を、神の御子であるイエスさまが代わりにすべて背負い、苦しみを受け、死んで、罪を贖って下さるのです。それが、イエスさまの十字架の死です。そして神さまは、イエスさまを死の中から復活させられます。イエスさまの十字架の死によって、わたしたちも罪に死に、イエスさまの復活によって、わたしたちも神さまと共に生きる新しい命に生かされ、永遠の命を与えられ、終わりの日には復活することを約束するためです。

死も奪うことが出来ない、神さまとの交わり。神さまの愛。ここに、世の何によっても失われることのない、本当の希望と慰めがあります。

イエスさまの苦しみは、わたしの罪のための苦しみです。イエスさまの十字架の死は、わたしを滅びから救い出すために、わたしの代わりに死なれる死です。イエスさまの復活は、わたしにも永遠の命を与え、復活を約束して下さるための復活です。

神さまは、神さまに対して苦しみや悲しみや怒りばかりを与えるわたしたちを、そこまでしてでも救いたいと思って下さり、わたしたちが神さまと共に生きることを望んで下さり、わたしたちの存在を受け入れて下さるのです。

イエスさまはそのことを弟子たちに、また人々に教え、御業を行なってこられました。神さまがそれほど人を愛して下さり、受け入れて下さり、命を与え、養い、癒して下さること。イエスさまの御業によって、罪を赦して下さることを伝えてこられたのです。

そして、ご自分は、そのことを実現するために遣わされたメシアであること。そのために苦しみを受け、十字架の道を歩まれること。このわたしの歩みに、あなたたちは自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。そのようにイエスさまは弟子たちに教えて来られたのです。

しかし、弟子たちはまだ、神さま、イエスさまの御心を理解することが出来ません。自分中心の思いを捨てることが出来ません。

今回は、弟子たちが自分たちの中でだれがいちばん偉いかを議論し始めた、ということが語られていました。弟子たちは、罪人であるどうしようもない小さな自分が、神さまに重んじられ、大切にされ、神さまの大変な忍耐と愛によって受け入れられていることを、まだ受け止めていないのです。

そのために、弟子たちはお互いも受け入れようとせず、自分の評価、人の評価を気にして、だれが偉いか、だれが重んじられる人か。だれが小さいか、だれが軽んじられてもよいか。そのように互いに優劣を付け、序列を決めようと議論し始めたのです。

神さまの御前で、小さく軽んじられて良い人などいません。まず自分自身こそ、神さまに逆らった罪のために、見捨てられ、軽んじられ、遠ざけられても仕方がない小さな者であったのに、神さまは憐れみ、目を留めて下さり、ご自分の御子であるイエスさまの命を与えてまでして、受け入れて下さるのです。それなのに。この神さまの許で生かされているのに、小さな自分が受け入れて頂いたことを脇に置いて、自分は小さな隣人を受け入れようとしません。

それで、イエスさまは前回の聖書箇所、「あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、もっとも偉い者である。あなたこそ最も小さい者であるのに神さまに受け入れられたのだから、あなたたちもまた、わたしの名のために、最も小さい者を受け入れ、迎え入れ、重んじて、共に歩みなさい」と教えられたのです。

<ヨハネの答え>

しかし、今日の聖書箇所では、前回に続いて弟子たちの無理解が顕わになります。

49 節にはこう書かれています。「そこで、ヨハネが言った。『先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちと一緒にあなたに従わないので、やめさせようと思いました。』」

ここで、気をつけて読まなければならないところがあります。

まず一つは、ヨハネが訴えている男は、イエスさまのお名前を使って悪霊を追い出していた。それをヨハネは確かに見たのです。イエスさまのお名前を使おうとしていた、のではなく、実際にイエスさまのお名前を使って、悪霊を追い出すことが出来ていたのです。その男は、イエスさまを信じ、その力に頼り、その上でイエスさまのお力が働いて下さっていた、ということです。

もし、イエスさまを信じないで、ただお名前を魔術的に使おうとしたのなら、そのような力は発揮されないでしょう。イエスさまの力、神さまの力を、人が思うように利用しようとしても、それは不可能なのです。しかしこの男は、イエスさまという方が、神の権威を持つ方だと信じ、その力に依り頼んだからこそ、悪霊を追い出すことが出来ていたのだと思われまます。

それがよく分かる対比が、9 : 37 以下で語られていたことです。イエスさまから直接悪霊を追い出す権能を与えられた十二人の弟子たちでしたが、ある男の子の悪霊を追い出して欲しいと頼まれてやってみても、出来なかったことがありました。イエスさまに与えられた力を自分の力と思い上がり、祈りを忘れ、神さまに依り頼まなかったゆえに、その力を用いることが出来なかったのです。

ヨハネが訴えている男は、確かにイエスさまのお名前で悪霊を追い出していた。その人なりにイエスさまを信じて従っていたということでしょう。

また、これに関連して、もう一つ気をつけることは、ヨハネが「わたしたちと一緒にあなたに従わないので、やめさせようと思いました。」と言っていることです。

ここの、ヨハネが言う「わたしたち」には、イエスさまは含まれていません。イエスさまに従っている十二弟子の集団の「わたしたち」です。ヨハネが「わたしたちと一緒にあなたに従わないので」と、イエスさまを「あなた」と言って別にしていることが分かります。

イエスさまに従う、わたしたちの弟子集団に、この男は入ろうとしなかった。この男は、あなたのお名前を使っているにも関わらず、わたしたちのように家を離れて、家族を置いて、わたしたちと同じように、あなたに従おうとしなかった、とヨハネは訴えているのです。

ですから、この男は、イエスさまに従わなかったのではありません。この男は、イエスさまの御言葉を聞いて、御業を知って、神の国を信じて、依り頼んで、自分なりの仕方で、十二弟子とは違う仕方で、イエスさまに従っていたのです。

当時、イエスさまに従っていたのは、十二人の弟子だけではありません。そもそもは他の大勢の弟子たちの中から、この十二人が選ばれたのでした。この後、七十二人の弟子が派遣される場面もありますし、一緒に旅をしていないけれども、イエスさまに救われ、信じた人々だって各地にいます。信仰生活の仕方、従い方は人によってそれぞれなのです。

その大きな一つの例が、8:26節以下に語られていた、ゲラサの人かも知れません。墓場で悪霊に取りつかれていた人を、イエスさまが救い出して下さったお話がありました。イエスさまを前に、悪霊は一人の男から豚の群れに入ることを願い、その豚の群れは崖を降って死んでしまった、という出来事です。

この時、救われたゲラサの人は、自分も十二弟子のように、家を捨てて、家族を置いて、自分の土地を離れて、イエスさまにお供したい、付いて行きたいと願ったのです。でも、イエスさまはそれをお許しになりませんでした。家に帰って、家族にイエスさまがして下さったことを語るようにと命じられたのです。

この男は、イエスさまと行動は共にしないけれども、イエスさまが望まれた仕方で、自分に与えられた場所で、イエスさまの弟子として従っていったのです。

救われた人、信じた人が、イエスさまに従う場所や、方法や、そのために与えられる賜物は、イエスさまの御心によってそれぞれ違います。一緒に来なさい、と言われる人もいれば、ここに留まりなさい、と言われる人もいます。派遣されて旅に出て、多くの人々に福音を伝える人もいれば、家族にイエスさまのことを伝えるという役割を担う人もいます。それは、一人一人に与えられた召しです。ですから、イエスさま以外の者が、どうすべきだ、こうすべきだと言えるものではないし、どちらが偉いとか、どちらが重要とか、どちらが正しいか間違っているか、と互いに言う合うものではないのです。

同じお一人のイエスさまに救われ、同じお一人の神さまに受け入れられ、同じ一つの聖霊に与って、その恵みに生かされ、従っている者たちなのです。方法が違っても、場所が違っても、共に救われ、同じ恵みを受けた者同士なのですから、それは互いに認め合い、助け合い、受け入れていくべきなのです。

しかしヨハネは、自分たちと一緒に来ないのが許せませんでした。自分たちこそ正しい弟子の在り方だ。自分たちの従い方こそ正統派で、弟子としてあるべき姿だと考えているのです。ここで、まさに前回の、「だれがいちばん偉いか」の議論が続いています。他のやり方、在り方を受け入れない。自分たちと違うなら排除する。やめさせる。自分が正しく、他は間違っている。十二弟子の特権意識、自分たちこそ、という思いが現れているのです。

<逆らわない者は味方>

イエスさまは、そんなヨハネに言われました。「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである。」

同じイエスさまを信じ、受け入れ、従っているのなら、神さまに受け入れられ、愛され、生かされているなら、あなたたちの方法とは違っていても、共に歩んでいる者たちなのだ。

あなたがたに逆らわないなら、あなたがたに反対しないなら、あなたがたも逆らったり反対すべきでない。それは主に共に従う味方として、仲間として歩みなさい、ということです。

ルカによる福音書が書かれた時代も、教会の中には色んな人たちがいました。同じルカが書いた使徒言行録を読むとよく分かりますが、使う言語が違う人、ユダヤ人、ギリシア人、身分の高い人、奴隷の人。色んな人々、色んなグループが、イエスさまを信じ、救われ、従っていたのです。その中で対立が起こったり、軽んじられる人が出たり、様々な問題が起こることもありました。でも、同じお一人のイエスさまに、信仰によって救われた。同じ一つの聖霊を注がれた。神さまが罪を赦し、神の子として受け入れて下さった。そこで一つとなり、同じ思いとなって歩んできたのです。

これは、今のわたしたちも同じではないでしょうか。教会にはたくさんの教派、教団、グループが存在しています。教会の中でも、色んな人がいます。でも、お一人のイエスさまに救われ、信じ、イエスさまの栄光のために歩む。その一点で、わたしたちは同じであり、共にイエスさまに従う味方同士なのです。だから、自分こそ正しい、他は間違っている、というのではなくて、そのような分け隔てを取り払って、違いを受け入れつつ、イエスさまに共に従って歩んでいくのです。

最も大切なことは、同じお一人のイエスさまに信仰によって救われ、イエスさまに従い、イエスさまの栄光を現わしていく、ということです。

もし、イエスさまご自身に逆らうなら、イエスさまに反対するなら、イエスさまの名を騙って、イエスさまの恵みを無にしたり、人をつまづかせたりするなら、それは受け入れるべきものではありません。自分と違う歩みをどう受け止めるかは、イエスさまにこそ従っているかどうか、まことに神さまのご栄光を現わす歩みかどうか、で見極めることになるのではないのでしょうか。

しかし、共に救いに与り、共に恵みを受け、共にイエスさまの名のために仕えていくなら、神さまに栄光を帰すことを願って歩んでいくなら、わたしたちの違いは、豊かさ、深さ、広さとなって、ますますイエスさまに用いられていくことが出来るのです。

神さまに受け入れられた小さな者同士が、共に神さまを見上げ、共に神さまを礼拝し、共に神さまの栄光のために仕えていく。神さまの御心の通り、すべての者が福音を聞き、イエスさまの救いを信じ、神さまを礼拝して歩む幸いに与る。そのことを、わたしたちはひたすら祈り求めながら、それぞれ与えられた場所で、方法で、賜物で、共にお一人のイエスさまに仕えていきたいのです。

【お祈り】

全能の父なる神さま

御子をわたしたちに与えて下さるほどに、罪人である小さなわたしたちを愛し、憐れみ、受け入れて下さったことを感謝いたします。

あなたの恵みを、イエスさまの十字架の死と復活によって与えられた罪の赦しと命を、心から受け取らせて下さい。わたしたちが自分の思いではなく、自分の力に頼るのではなく、自分を捨てて、神さまに依り頼んで、イエスさまに従って、歩いていくことが出来るようにして下さい。

わたしがあなたにそうして頂いたように、わたしたちも小さな者を受け入れ、隣人との違いを受け入れ、イエスさまにあって共に生きていく者となる事が出来ますように。

わたしたちの傲慢な思いを退け、ただイエスさまが与えて下さった恵みに生きる者として下さい。聖霊なる神さまによって、わたしたちをイエスさまに結び合わせ、わたしたちの思いを一つにして下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン